

ティアニー先生の診断入門



著：ローレンス・ティアニー，
松村 正巳

A5 頁 152 2008 年
定価 3,150 円(本体 3,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00698-9] 医学書院刊

ローレンス・ティアニー先生の鑑別診断力のすごさが披瀝されている本書が、好調な売れ行きであると先生自身の口から聞く機会が最近あった。誠に慶賀にたえない。新医師臨床研修制度が開始されて5年近くになるが、研修現場で今も足りないものの一つに「臨床推論・診断推論の訓練」が挙げられる。初期研修医の学習対象が検査や治療手技になりやすく、病歴と身体所見から病気や病態の検査前確率を推定してゆく診断学が、なかなか王道に位置されないのである。

ティアニー先生の真骨頂は、病歴のみに基づく診断と最終診断との一致率がことのほか高いことにあると思われる。膨大な臨床経験が頭脳の中に質高くまとめられているからであろう。その後に身体所見を加えて検査前確率を上下させるわけだが、先生にとって身体診察の寄与率はあまり高くはなさそうである。しかし、本書の5頁の文言に接すると、そうとばかりもいえないことがわかる。

「私は、最初の出会いの30秒間が、最も豊かな瞬間であると常に信じてきました。…このような観察は病歴ではなくて、むしろ身体診察の一部と思われませんか。観察、打診、触診、聴診は病歴聴取の後にとられるものと伝統的に教育されてきました。しかし、実際には身体診察の一部分は、すべての医師にとって患者との出会いのなかにあります。」

診断推論法には、仮説演繹法、徹底的検討法、アルゴリズム法、パターン認識などがあるが、ティアニー先生が頻用するのは徹底的検討法(本書13頁にあるように11のカテゴリーに分類)である。パターン認識による一発診断もお得意だし、仮説演繹法も駆使できるのに、徹底的検討法にこだわるのは、呈示症例に難問が多いため、また教育を楽しむためだと見受けられる。

さて、本書の優れている点は、以下である。第1に、以上のようなオーソドックスな診断過程が、具体的な12症例を用いて臨場感豊かに展開されていること。ティアニー先生と松村正巳先生の共著の意味が納得できる。第2に、松村先生の訳がこなれていること。第3に、松村先生のティアニー先生への尊敬の念があちこちでみられるのだが、とても自然で、初々しく感得されること。第4に、大部でなく、週末を利用して読破できること。

お二人の出会いがあったと聞く2002年春の京都での国際内科学会議の直前のエピソードを、今でも懐かしく思い出す。学会事務局から私(市立舞鶴市民病院勤務中)に連絡が入ったのである。「ティアニー先生との連絡が全くとれません。他の先生方は京都に前泊してもらおうのですが、…既に日本におられるとの話なのですが、そちらでしようか？」実はティアニー先生、当時の同院での“大リーガー医”招聘中の身分だったので、京都へは日帰りの予定だったのである。問題は、そのあたりを事務局に一切連絡していなかったのも、右往左往を惹き起こした次第。皆がやきもきする中を悠々と数分前に到着との由だが、これはいつものこと。かように事務能力はゼロに近いのだが、米国でもClinical Masterの名をほしいままにされている生涯現役教師というのが憎い。